

愚かでチャーミングな戦争加担者

鈴木裕美

今回の最終選考に残った7作品は、それぞれの魅力があり、全てとても面白かった。

中でも私はくるみざわしんさんの『白地に赤く、日の丸とカッポウ着』に強く惹かれた。その愚かでチャーミングな主人公に強く惹かれたと言ってもいい。

主人公の〈橋本ふみ〉は56歳の、まごうことなきおばちゃんだ。彼女は愛されて生きてきたし、周囲を愛して生きてきた。そしてその真心から「国防婦人会」を創設する。

橋本ふみは私に、イプセンの『人形の家』の主人公、ノラを強く想起させる。ノラも愛されて育ち、愛に溢れた女性だ。彼女は愛する夫を救うため借金をし、死の床にある愛する父に心配をかけないようにするため、父のサインを偽造する。しかし、その行為の理由は愛だけなので、彼女はそれは当然許されるべきだと思っている。

ふみもその行為の根幹には愛しかない。だから、ノラのように自分を信じて行動し、突き進み、国防婦人会は大きな組織に成長する。そして物語の最後で、彼女は自分の行為が正しかったのか迷う。焼夷弾が降り注ぐ中、彼女は言う。「ちょっと爆弾落とすのやめといてんか。うち考えんと」私はこの台詞がとても好きだ。当たり前だが、お願いしたところで爆弾は降り止まない。彼女の愚かであるが誠実で切実な言葉は、おかしいと同時に哀れで胸を打つ。

そして、彼女の最後の台詞とト書き。

ふみ「頼む。うち、考えたいんや。いったい、うちは。」

焼夷弾が落ちる。

大阪は火の海。

ふみは炎にのまれていく。

手にヤカンと割烹着を持ったまま。

そして戯曲の最後のト書き。

炎は燃え続ける。

戦争は終わらない。

考える暇はない。

溶暗。

まだ戦争は始まっていない今こそ、考える暇を持つべきだという作者のストレートな主張を感じた。

戦争を描くのに、愚かな人、また、愛すべき人が登場する戯曲はたくさんあるが、愚かで且つ愛すべき人、チャーミングな戦争加担者が主人公の戯曲はあまりないのではないか。『白地に赤く、日の丸とカッポウ着』は非常に多くの登場人物を、書き分けている点も優れていると思う。しかし私としては、橋本ふみを主人公に、彼女の内で行く葛藤について、もう一本お書きになっても良いのではないかと、僭越ながら思う。

私は『白地〜』を大賞に推したが、大賞にならなかった『白地〜』を佳作には推さず『その桃は血の味がする』に票を入れた。

今回の選考会では、大賞と佳作の意義について話し合う時間があったが、私は佳作を〈2番目に良かった作品〉が受賞するものとは考えていないからだ。感覚的で分かりづらく誠に恐縮だが、私は大賞の作品には、圧倒的な大きさの何かが存在して欲しいと思っており、佳作には小さくても良いので、硬い何かが存在して欲しいと思っている。

その意味で、今回大賞を受賞した『花を摘む人』は素晴らしい作品だと思うが、私としては佳作に相応しいと思っていた。ダムに沈んだ村、自死、無惨に切り取られたヒマワリ、どの場面に

も死の影があり、どの場面にも昼顔の生命力が対比として描かれる。ダイヤモンドのような硬質な美しさを持った作品だと思う。ただ、もしかしたら未上演作品だからかもしれないが、俳優や観客に何かを期待していない閉じた空気を感じ、それが私には残念だった。

『その桃は血の味がする』は確か村上龍氏の40年くらい前のエッセイを思い出させた。「作家として自信が揺らぐと、新宿の副都心を見に行く。漱石も鴎外もこの景色は見えていない。これを見ている自分には新しい小説が書けるはずだと自分を奮い立たせる」といった内容のものだ。

『その桃〜』で語られる言葉、テンポ、人々の傷つき方など、どれもがまだ舞台に乗ったことのない新しい景色だと思う。そして、大上段に構えず、自身が捕まえられたことのみをしなやかに描くところに、やはりダイヤモンドのような硬質な確信を感じた。

今年の受賞作はどちらも未上演作品だった。来年は多くの作品が上演できることを、心から願う。